

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第26回 えんじょうじじろう
圓城寺次郎

新聞記者の道へ

圓城寺次郎は明治40(1907)年、印旛郡公津村下方(現在の成田市下方)に父貞吾、母けいの次男として生まれた。

成田中学校(現在の成田高校)4年生の時に虫垂炎を患い、その手術が原因で心臓を悪くしてからは、ほとんど学校に通うことができなかった。卒業後も自宅で療養生活を送っていたが、体調が落ち着いてきた昭和2(1927)年、早稲田大学に入学した。

大学を卒業した次郎は、昭和8年、新聞記者として中外商業新報社に入社。日本銀行、大蔵省(現在の財務省)などの担当記者として経験を積んだ。社名が日本経済新聞社に改称されるなど、会社の転換期となった同21年には、編集局長に就任した。記者のトップとして熱心に後輩の育成に当たる傍ら、日本経済新聞の人気コラムである「私の履歴書」や「経済図書室」(現在の「やさしい経済学」)などの連載を開始した。

革新的な事業を展開

次郎は、経済新聞は記事を掲載するだけでなく、経済の研究をすべきであると考え、昭和33年に社内に経済研究室を設けた。さらに、研究と経済政策を連携させることで日本経済の発展に役立てたいと、同38年には研究室を基に日本経済研究センターを設立。センターは多くの経済学者に研究の場を提供するとともに、財政・金融・産業の各分野の調査・研究や政策提



コンピューターによる新聞製作システムが完成

明治40年～平成6年(1907～1994)

印旛郡公津村下方(現在の成田市下方)に生まれる。早稲田大学卒業後、中外商業新報社(現在の日本経済新聞社)に入社。日本経済新聞の人気コラム「私の履歴書」の連載を開始したほか、日本経済研究センターの設立、新聞製作へのコンピューターの導入など革新的な事業を行った。



言を行うなど、経済研究の中心的な機関となっていった。現在でもセンターが発表する中・長期の経済予測は多くの企業で支持されている。

昭和43年に日本経済新聞社の社長に就任すると、コンピューターを使った新聞製作システムの導入に着手した。さらに記事にならなかった中小企業などの情報に目を付け、日経流通新聞(現在の日経MJ)、日経産業新聞をはじめ、専門の情報を深く掘り下げて紹介するさまざまな経済誌を刊行した。

また、美術への造詣が深い次郎は、日本経済新聞社主催でインド古代美術展、東山魁夷展などさまざまな美術展を世界各国で開催した。そして美術展の展示品を紹介する「美の美」(現在の「美の粋」)の連載をスタートさせ、経済だけでなく芸術にも強みを持つ新聞としてのブランドを確立した。次郎の功績により、日本経済新聞は紙面作りの工夫が評価され、優れた文化活動に送られる菊池寛賞を受賞した。

昭和51年に次郎は会長に就任し、同55年には顧問となった。そして平成元(1989)年、新聞界の発展に尽くした功労者として新聞文化賞を受賞した。さらにその活躍は新聞社だけにとどまらず、経済審議会会長、中央社会保険医療協議会会長など多くの公職を務め、社会にとって大きな役割を果たした。

新聞社から国の発展までを担ってきた次郎は、平成6年3月、86歳でその生涯を閉じた。

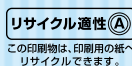
編集後記

表紙の「夏の木工体験広場」では、貯金箱やロボットなど個性豊かな作品を見ることができました。「工作の宿題にいいですね」と参加者と話していると、ふと、小学生の頃の苦い記憶が。あれを作ろうかな、これもいいなと悩んでいるうちに夏休みの終わりが見え、毎年焦って宿題に取り組んでいたことを思い出しました。そして今、編集後記の内容をあれこれと悩んでいるうちに、締め切りぎりぎりになってしまっています。昔も今も変わらないなと思いました。

令和元年8月15日号 No.1393

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。